

キの割り材を整形しないまま使った粗い作りのもので、「志らふ」と読めるが、意味は不明である。裏面にも文字はあるが、釈読できない。これまで古代の木簡の出土しか知られていなかった中村遺跡で、他の遺構・遺物と結びつく(2) (6)のような中世以降の木簡が確認されたことは、遺跡の性格を考えていく上で重要な成果といえよう。

(7)は、旧河道の八世紀代の包含層から出土した絵馬である。上辺と下辺を少しずつ欠いている。文字は裏面に一文字確認できるが、読み取れない。

(鈴木敏則)

静岡・箱根田遺跡

はこねだ

- 1 所在地 静岡県三島市安久
- 2 調査期間 一九九九年(平11) 十二月～二〇〇〇年五月
- 3 発掘機関 三島市教育委員会
- 4 調査担当者 寺田光一郎
- 5 遺跡の種類 官衙(津)跡か
- 6 遺跡の年代 八世紀後半～一〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(沼津)

箱根田遺跡は、伊豆半島北部に所在し、東側に箱根山、北側に富士山を望む田方平野の中央部に位置する。遺跡は、駿河湾に注ぐ狩野川の支流である大場川の右岸に所在し、一九〇〇㎡の範囲に広がる。調査地点の東側は同河川の溢流堆積物が形成した微高地で、北から西側には条里水田が展開している。

今回の調査は店舗建設に伴うもので、三八八㎡を

跡からはほぼ同じ形状をもつ木製品（斎串か）が多量に出土している点から、木簡の性格については断定しがたい。

(2)は完形。裏面無調整。厚さは均一でなく、左側が薄い。二文字目は「マ」のように見えるが、その記載内容は明らかでない。可能性として、「ハマ」の「マ」を「郷」の草書体と考え、伊豆国田方郡八邦郷の郷名を初めの一字で簡略に示したものと考えられることを指摘しておきたい。中央部は墨が薄く、判読できないが、二名の人名が続くとみて間違いなからう。木簡の形状および人名が記されている点で、(1)と同じ性格の木簡と思われる。また、冒頭に二文字程の記載がある点でも類似している。

(3)は上端及び両側面は原状をとどめているが、下端は折れている。冒頭に日付が数回繰り返し返されるほかは、墨痕が確認できる程度で、判読は困難である。日付の記載から、箱の蓋を帳簿に転用したものかとも思われるが、品目・数量・人名などの記載がみえないこと、「廿日」が連続して記載されていることなどから、単なる習書の可能性もある。

なお、木簡の釈読と解釈は国立歴史民俗博物館の平川南氏による。

9 関係文献

三島市教育委員会『箱根田遺跡―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（二〇〇三年）

（鈴木敏中）

